

説明：元アルジェリア大使のドイツ人外交官による改宗記。第一部。

よりウィルフレッド ホフマン

掲載日時 31 Aug 2015 - 編集日時 06 Sep 2015

カテゴリ：記事 > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [著名人](#)



ドイツ人の社会学者 外交官であるホフマン博士は、ハーバード ロー スクールで博士号を取得し、1980年にイスラームに改宗しています。

ホフマン博士は、ドイツでカトリック教徒として1931年に生を受けました。彼はニューヨークのユニオン カレッジを卒業後、1957年にミュンヘン大学で法学博士号を取得しました。

彼は行政手続き改革における研究職の助手となり、1960年にハーバード ロー スクールから法学修士号を取得しました。彼は1983～1987年の間、ブリュッセルのNATOで情報局長を務め、1987年に駐アルジェリアのドイツ大使として任命され、次いで1990年に駐モロッコ大使を4年間務めました。また1982年にウムラ（小巡礼）を行い、1992年にハッジ（大巡礼）を行っています。

ホフマン博士によるイスラーム改宗は、いくつかの経験が転機となっています。そのうちのひとつに、ドイツ大使館の駐アルジェリア大使として任命された1961年当時、8年間に渡って繰り返されていた、アルジェリア独立のためのフランス軍とアルジェリア国家戦線による血なまぐさいゲリラ戦が挙げられます。そこで彼は、アルジェリア国民が被った残虐な殺戮を目の当たりにしました。毎日、十数人もの人々がアラブ人だというだけで、あるいは独立を主張しただけで「至近距離からの処刑方式」で殺されていました。「私は極度の苦難におけるアルジェリア人の忍耐と適応性、ラマダーン月における圧倒的な自制心、勝利に対する自信、また惨めな状況の中での人情を目撃した。」彼らにそうさせているのは宗教に他ならないと彼は感じ、彼らの啓典であるクルアーンを研究し始めました。「私はその日以来、一日も欠かさずそれを読み続けている。」

ホフマン博士のイスラーム改宗における第二の転機はイスラーム美術でした。彼は幼い頃から芸術や美術、バレエなどに関心を示していましたが、強烈な魅力を訴えかけたイスラーム美術を知ったことにより、それらすべてへの興味を失った程でした。イスラーム美術について彼はこう言います。「その秘密は書道、アラベスク装飾、カーペット様式、モスク家屋建築、都市設計などの芸術的表れの中に、宗教としてのイスラームが普遍的な存在感として潜んでいるように思えた。いかなる神秘主義も吹き飛ばしてしまうようなモスクの輝かしさ、建築設計の民主的精神からも考えさせられた。」

「また、内省的傾向のあるムスリム宮殿、そして日陰や噴水、小川に満ちた楽園である

とされる天国への願望、共同体の精神を育む複雑な社会的機能を持ち、熱と風を調整する古い大都市地域（マディーナ）、また市場の透明性、モスクの調和と周辺地域の福祉施設、また市場や住宅地での学校や寄宿舎の確保についても考えられた。私は多くの場所でこの上なく素晴らしいイスラーム的経験をした。イスラーム的調和、イスラーム的人生、そしてイスラーム的な空間の概念は、心と精神に疑いの余地なき影響を与えるのだ。」

彼による真理の探求において、おそらくそれらすべてよりも大きな影響を与えたのは、キリスト教の歴史と教義についての徹底した知識でした。彼は、信心深いキリスト教徒が信じているものと、大学で歴史の教授が教えていることに大きな相違があることに気付きました。彼は特に、歴史的イエスの教えよりも、パウロが確立した教義を教会が優先して導入したことについて重大な懸念を持っていました。「イエスに一度も会ったこともなかった彼（パウロ）は、その極端なキリスト神学をもって、正しいユダヤ キリスト教的キリスト観を書き換えたのだ。」

彼は人類が「原罪」というものを背負わされているという概念や、神が自らの被造物を救うために自らの子を拷問させ磔にさせたということを受け入れることができませんでした。「私は、神が自らの創造に失敗するという、つまりアダムとイブが元凶とされる災難のために子をもうけ、命の犠牲という血なまぐさい方法をとることなしに何もできないということ、そして神が自ら創造した人類のために苦しむということがいかにとんでもない、冒瀆的であるということに気付き始めたのだ。」

彼は神の存在という、至極基本的な疑問に立ち返りました。ウィトゲンシュタイン、パスカル、スウィンバーン、カントなどの哲学者らによる著作を分析した彼は、神の存在に対する理知的確信に至りました。その次に彼が対峙した論理的疑問は、いかに神が人類を導くために彼らと意思疎通するかということでした。それにより、彼は啓示の必要性を認識するに至ったものの、ユダヤ キリスト教、もしくはイスラームの啓典のどちらに真理があるのかという疑問が残ります。

その疑問に対して、彼は次のクルアーンの章句から答えを得ました。これは彼にとって第三の重要な転機となったのです。その章句は彼の目を覚まし、ジレンマを解消する答えを与えました。それは「原罪」という概念と、聖人による「仲介」の見込みを否定し、その重荷から彼を解き放ったのです。「ムスリムは聖職者や宗教的階級が存在しない世界に住んでおり、ムスリムが祈るときはイエス、マリア、その他の聖人を介して祈るのではなく、完全に解放された信仰者として、直接神に祈るのである。そしてこの宗教は神秘といったものとは無縁である。」またホフマン博士は、「ムスリムとは自由かつ卓越した信仰者のことなのである」と述べています。

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/124>

Copyright © 2006-2015 www.IslamReligion.com. All rights reserved.